

教師の収穫



「この授業はうまくいかないのでは？」

事前の授業検討会で私はこう言いました。物語の展開についての問いに対し、子ども同士で議論する授業が計画されていました。子どもたちそれぞれが、それぞれの力量で文章を読み、場面や登場人物をイメージして、それらを自分の言葉で表現して相手に伝えること。逆に相手が伝えていることを理解し、自分の考えと比較、異論があれば相手に伝え、納得がいけば自分の考えに加えて深めていく。単に議論と言っても、こうして文章にするとなかなかのハードルの高さなのです。三年生には失礼ながら、子どもたちの実態をふまえると厳しいのではという意見は少なくなかったと思います。教材は「モチモチの木」（斎藤隆介一九七一）です。この授業は、一昨日行われました。三年四組、授業者は担任の鶴野雄太教諭です。

「そりゃ楽しいですよ」

担任はどうかと尋ねると決まってこの返事でした。鶴野教諭は昨年英語専科でした。しかし、本人たつての希望により今年には担任をしています。元気の良い三年生と向き合う中では、様々な産みの苦しみ（あえて「苦勞」とは表現しません）がありました。ゲッソリしているときもありましたが、答えはいつも同じです。

事前検討会では、「うまくいかない」「おそらく失敗する」と言われても、鶴野教諭はそうした意見をやわらかく受け止めながらも、授業展開を変えることはありませんでした。周りに言われ校長に言われ、外部から来ていただいている指導教諭にも言われ内心面白くなかったと思います。それでも節を曲げない鶴野教諭には、子どもたちが積極的に意見交換を行っている明確なイメージがあったに違いありません。これはとても大事なことです。担任にしかわからない、担任しか描けないイメージなのです。教える子への信頼の証でもあります。

授業はトライ＆エラーの繰り返しです。どのように教えるかという視点で、私たちは日々失敗を繰り返しています。あの時にこう返せば、こう問えば、この教材を使えば、…きりがいいほどの内省を日々繰り返します。自分で良かったと思える授業もないことはないのですが、「良かった」だけでは向上しません。学級経営も同様です。鶴野教諭は子どもの可能性を見出し、積極的に議論を交わすイメージの具現化にトライしたのです。

「いやー、もうちょっとー！」

授業終盤に、もう意見をまとめて議論を終えるかどうかを鶴野

教諭が子どもたちに投げかけたときの反応です。

これが、この日の授業を物語っています。本当によく議論していました。「どこに書いてあったの？」「どうしてそう思ったの？」「へー、なるほど」等々、友達の考えを聞いて、にこやかに相手に問いかける姿がそこかしこで見られました。多数の参観者の前で気が抜けないものもあります。確実にそれ以上の頑張りがありました。自分の考えをそれぞれが持ち、根拠となる叙述を明らかにし、登場人物や場面を自分と重ねた生活体験をも出しながら、議論をしていました。鶴野教諭はニコニコしながら、あくまで子どもの発言を促すことで授業を進めていきました。そう、すばらしい授業だったのです。

「失敗とか言っつてごめんなさい」

授業後の研究会で私はすぐに謝りました。実際すばらしい授業でしたし、何より三年四組の子どもたちの力を信じて考えを曲げなかった鶴野教諭の授業者としての姿勢に感服しました。もちろん子どもたちにも感心しました。友達の話をよく聞いて、楽しそうに学ぶ子どもたちの姿に、参観者は自然と笑みがこぼれました。そんなうれしい気持ちで「ごめんなさい」と謝罪しました。

「鶴野先生は収穫を受け取る時です」

数ヶ月にわたってご指導いただいている吉本指導教諭（八代市立八千把小）は、私同様に「この授業は失敗すると思う」と言ったことを謝罪しつつこのように言われました。

しかし、授業展開の変更を勧めなかったのは、吉本指導教諭も鶴野教諭と子どもたちに何らかの可能性を見出しておられたからでしょう。それがこの言葉に繋がったのではないかと思うのです。職員の中からも「鶴野先生の学級経営の賜」という発言がありました。まさにそうだと思います。

手前味噌ながら、今回は職員を褒めちぎりました。しかし、鶴野教諭の努力を証明したのは子どもたちです。積極的に、楽しそうに学ぶ子どもたちの姿があったからこそ、担任として授業者としての努力がしっかりと参観者に伝わりました。子どもたちの姿こそが、教師の収穫です。

